

ミアとクーボ



次女のミアは、小さい頃から生きものに好かれる子だった。小学校に行く途中に、母親の友だちの家があり、そこにはイチローという大きな雄犬がいた。イチローは、遠くからでも匂いで、ミアが近づいてくるのがわかる。そうすると、いつもうれしくて、「早く来て！」と吠える。ミアが来て、イチローに近寄ると、走ってきて大きな身体をぶつけてくる。おしっこをかけるときもある。犬がおしっこをかけるのは、親愛のしるしなのだ。

我が家では、ミアが3歳くらいの頃からずっと文鳥を2羽飼ってきた。黒い羽のクーボが雄、白い羽のピッチーが雌だ。生まれたばかりのひなを買ってきて、細かくした餌で育てた。小さな鳥カゴの中だけではかわいそうなので、窓を閉めて、マンションの3DKの部屋中を自由に飛べるようにした。

朝、鳥カゴの戸をあけると、文鳥はさっと飛びたって、部屋中を飛び回る。

やすむときは、おきいりのばしよやすぶんちよういちばんおきいりのばしよ、
ミアのてのひらだ。ぶんちようかぞく家族のみんながいっせいに「おいで！」と手
のひらをさしだすと、わ2羽とも、いつもミアのてのひらにとまる。ミアのあねは、
そのたびにちょっとざんねん残念そうだった。

あるとき、まいへやまどすこああるとき、1枚だけ部屋の窓が少し開いていたときがあった。そこからクーボ
がそととだ飛び出してしまった。かぞくあ家族は開いていた窓とは別の部屋にいたので、しば
らくそのことにきづかなかった。でも、どうもピッチーのようすがおかしい。

みぶなごえいっしょうけんめいわたしなにつたわたし
身振りと鳴き声で一生懸命、私たちに何かを伝えようとしている。私たちは
クーボがいないことにきづいた。どうやらクーボがそとで外に出て行ってしまったよ
うだ。

あわてて、かぞく家族みんなで外を見ると、クーボらしい小鳥が団地の中を飛び回っ
ている。ははおやミアはあわてて外に出た。クーボはだんちきゅうすいとうやね
っていた。ミアがクーボによ呼びかける。でも、ひろいところに出て怖かったのだろ
う。クーボはきゅうすいとうやねとた飛び立ってしまった。ミアはいっしょうけんめいなんかい
クーボによ呼びかけて、て手のひらをさしだした。すると、なんかいめよ
たえて、クーボはミアのちいさなて手のひらにおりてきた。

ぶんちようへいきんじゅみようねんねんへやなかじゅうとまわ
文鳥の平均寿命は8年から10年だという。しかし、部屋の中を自由に飛び回
らせていたからなのか、わやぶんちようながい我が家の文鳥たちは長生きだった。やがてピッチーは
12さいくらいでな亡くなり、クーボはわ1羽だけになった。それでも、クーボはげんき
だった。

ピッチーが亡^なくなって 3^{ねんた}年経ち、ミアは高校^{こうこう}3^{ねんせい}年生になり、大学^{だいがく}受験^{じゅけん}のための
勉強^{べんきょう}に集^{しゅう}中^{ちゅう}していた。クーボは15^{さい}歳^{さい}になっていた。ミアは休憩^{きゅうけい}のとき、部屋^{へや}
のふすまを少^{すこ}しあける。すると、クーボはその隙^{すき}間^まからすばやくミアの部屋^{へや}にピ
ョンピョン跳^はねて入^{はい}ってくる。そして、ミアの手^てのひらにおさまるのだ。

寒^{さむ}い冬^{ふゆ}のある朝^{あさ}、ミアはまだ自^じ分^{ぶん}の部屋^{へや}で寝^ねていた。すると、クーボが、閉^しま
っているふすまに小^{ちい}さな身^{からだ}体^{なんかい}を何^な回^{かい}もぶつけてきた。「中^{なか}に入れて！」と言^いって
いるようだった。ミアがふすまをあけると、クーボはミアの手^てのひらで安^{あん}心^{しん}した
ように目^めを閉^とじた。数^{すう}日^{じつ}前^{まえ}からクーボは少^{すこ}しづつ弱^{よわ}っていた。

その日^ひ、ミアは、昼^{ひる}は高^{こう}校^{こう}に行^いき、夜^{よる}は塾^{じゅく}に行^いかなければならなかつた。高^{こう}校^{こう}
から帰^{かえ}って、塾^{じゅく}に出^でかけるまでの間^{あいだ}、ミアは、クーボの小^{ちい}さな身^{からだ}体^{なんかい}をブランケ
ットにつつんで、手^てのひらで暖^{あた}めてあげていた。クーボはど^よん^よん弱^{よわ}っていつ
た。クーボのことを心^{しん}配^{ぱい}しながら、ミアは塾^{じゅく}に行^いった。母^{はは}親^{おや}は、ミアが塾^{じゅく}に行^い
っている間^{あいだ}に、クーボが死^しんでしまうのではないかと心^{しん}配^{ぱい}だった。塾^{じゅく}の終^おわ
る時^じ間^{かん}に、母^{はは}親^{おや}は、ブランケットに包^{つつ}まれたクーボをひざにおいて、車^{くるま}でミア
を迎^{むか}えに行^いった。塾^{じゅく}が終^おわって、ようやくミアはブランケットの中^{なか}のクーボに
再^{さい}会^{かい}することができた。

塾^{じゅく}からマンションに戻^{もど}って30^{ぶん}分^{ぶん}もしないうちに、クーボはミアの手^てのひらの
中^{なか}で呼^こ吸^{きゅう}を止^とめた。安^{あん}心^{しん}したよ^{ひょう}うな表^{じょう}情^{じょう}だった。

(1562^じ字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.